

2013岡山市芸術祭

岡山市民の文芸

第45回岡山市民文芸祭受賞作品

一般の部

【現代詩】

◎岡山市長賞

蝶結び

山本照子

青いりぼんで結んだ蝶の形を見ているだけで
私の来し方がまざまざと立ちのぼつてくる
左右の羽の 形がちがう 大きさがちがう
濡れた子猫のよう に縮みあがつて いる

母は私が三歳のときに死んだ
母の分までも私を守つてくれた父
夏休みの宿題は徹夜でやつてくれた
いじめっ子をみると

その子の前に立ちはだかつてくれた
限なく守られて臆病になつた私は

父の影のなかに私だけの野原をつくつた
そこでは小鳥や虫を意のままに動かせた
そこでは風に舞う麦藁帽子よりも自由だつた
父の死後も野原をでることがないままに
一本の木のよう に夢想の枝葉を茂らせた
残り時間を数えるようになつて
うかうかと過ぎ去つて いつた日々への
悔いが芽生えた

惰眠を貪りつづけて

ぎこちなくなつた十本の指で
初めて真剣に青いりぼんに取り組む
りぼんとりぼんが触れ合う
シユルシユルと言うはかない音は
羽化を待つて いる蛹の心音だ
来し方から脱皮したい今の私を
その心音に重ねてゆく
もう一度 初めからもう一度
ついに出来た
左右の羽の形は完璧な対称だ
ありつたけの力で羽を広げて
私の見守るなか蝶は大きく羽を動かしながら
窓をでて 空の高みへと舞いあがつた

今こそ私の野原を確と脱ぎ捨てる
半開きの歳月をかさねてきた
眼に 耳に 鼻に 舌に 皮膚に
高鳴る胸の鼓動を送り込む そして
茜に染まるこの指で 私の名残を打ち鳴らす

影法師

津田恭子

私が椅子から立ち上がる
影法師もゆっくり椅子から立ち上がる
影法師と私は重なるギリギリの場所にいて
お互いにお互いの様子を伺っている

ねえ 影法師さん そばにおいでよ
私もそばにいてあげるから
雲が出て 影法師の輪郭が薄れてくると
私は少し気弱になつていた

影と戯れていた幼いあの日
自分の影法師には どれだけ走つても
走つても 追いつくことはできなかつた
眼の前に タタタふたりきりなのに
階段を一段とばしで飛び降りて
ジャンプして 身を乗り出しても
ゆらゆら揺れるだけの影法師は
私からスルスル逃げてしまう

夕方 陽射しの向きが変わると
今度は 私の後ろを追い始める影法師
振り返ると 一定の距離を保ちながら
私に接近しそうで 接近できない

ほら 私を追い抜いてごらん
影法師に無理だとわかつていて
ため口をききながら背中を向けても
影法師は 何も語らず立ち止まつたまま

背丈が幾分長くなつた影法師は
ひよろひよろついて来るだけ
私が後ずさりすると 同じように
足元から後ずさりする 道化師みたいな存在

ねえ 一体どこまでついて来るの
私は 今までどんな影法師を育ててきたの
途方に暮れて立ち止まり また歩き始める
私としつくりいかない 天の邪鬼な影法師

レッドカーべット 二人

うさぎのシツボ

三十数年振りに二人で歩くレッドカーべット
結婚式で歩いたヴァージンロード以来だね

奥津渓から白瀬へ

真っ赤に敷き詰められた
紅葉のレッドカーべット

さらさらと流れる川が

心地よい音楽を奏でる

僕はグリーンのズボンに白のシャツ
かつこいい、ペープルのジャケット
君は茶色のパンプスに白のブラウス
おしゃれな こげ茶のスカートに
オレンジのカーデイガン
二人とも眼鏡に白髪頭

若さもバイタリティーも無いけれど
新婚の気分じゃないけれど

なんだか満たされた気分
三十数年も寄り添つた君へのプレゼント

この風と光とレッドカーべット
君にしかあげられない

君だからあげられる
この風と光とレッドカーべット

どちらかが命尽きて寂しくなった時
このレッドカーべットを歩こうよ
このレッドカーべットを歩こうよ
きっと、どちらかが
風となつて

このレッドカーべットを敷き詰め
光となつて
このレッドカーべットを照らします

真夏の贈り物

栗原由美

山の斜面の畠にはスイカ畠がある
収穫は私の仕事
カラス避けの網は低く巡らせてあり
体をほぼ半分に折つて歩く
ラグビーボールのような形のは

脇に一個ずつ抱えて運ぶ
丸くて大きいのはお腹に抱えて運ぶ
何往復もしたところからまた
ネコ車まで斜面を数メートル運ぶ

結構腰にくる

と、腰を下ろした途端
最後のラグビーボールが

ひとりでスタートした

それは

スローモーションのよう始まつた
行き着く先はネコ車ではなく 溝の中
石橋をうまく渡ればよいけれど
落ちてひび割れる場面をとつさに描いたが
転がる様子がおかしくて
結末はもうどうでもよかつた

ゴロン、ゴロンと
バケツや杭に当たりながら転がつていく
アニメーションや映画のシーンを直に
観ているようで楽しかつた

ラグビーボールは予想に反して
石橋を軽く渡り
側溝の上の草の上に
見事に着地した

笑いが止まらなくなつた
見上げると
ブドウ棚の隙間から
真夏の空も笑つていた

望潮

しおまねき

玉上由美子

轟音をまき散らしながら
さつきまで降り続けた雨は
一体
どこにいつてしまつたのか

橋を流し 煙を瀆し
それでもまだ
鬱鬱を押さえきれずに
ヒトをも壊した

あの雨粒たちは
吐き出した漆黒のあれこれは
どこに どの辺りに
隠れてしまつたのか

目の前に拡がる
灰色泥色の
海に繋がつてゐる砂浜には
雨粒の欠片も見えず

ちらちらと

しおまねき
望潮が顔を出す

ここは私達の場所

ここからは私達の出番

邪魔者はいらない

この鉄をこらん

強いよ 恐いよ 大きいよ

ここは私達の住処

持つて行きようのない鬱鬱なんて

抱えようもない鬱鬱なんて

私達は知らない

ただ 私達はここで生きているだけ

くいいいと

しおまねき
望潮が私を威嚇する

ゆたゆたと繰り返す波音

水の引いた

海に繋がる砂浜には

しおまねき
望潮が住んでいる

【短歌】

◎岡山市長賞

〈こんちきちゃん〉祇園囃子の聞こえ来る独りきりなる姉の電話に

安藤 兼子

にはか雨の零の透きて光りゐる朝のトマトの量感を挽ぐ

西崎 淑子

亡き夫に問ふことありて訪れし恐れの山の石づみの海

石井 佳子

人間にも春には芽吹きがあれば良い我もかかげてみたい花がある
シベリアの森に慰靈す祭壇に軍事演習の大砲ひびく

前田 智恵子

【俳 句】

◎岡山市長賞

たんぽぼや対角線に夫の居り

花房 典子

◇岡山市教育委員会教育長賞

田植機に跨がり齡忘れけり

藤本 哲

花火はて闇に街騒詰まり出す

荒木 絹江

一つ田を妻と分け合ひ田草取

本城 道正

研ぎあげて先づ試し切るトマトかな

阿部 ひふみ

【川 柳】

◎岡山市長賞

ふる里に赤いポストといふ記憶

宮本 信吉

◇岡山市教育委員会教育長賞

かけ違うボタン探しの竹トンボ

松原 敏和

侘び寂びの色なんですよ肌のしみ

中尾 さだえ

苦労した過去には触れぬ丸い石

伊藤 寿子

浴衣着て日本を少し取り戻す

奈良木 茂正

【隨筆】

◎岡山市長賛

私のお気に入り

出戸 真喜子

「サウンド・オブ・ミュージック」という映画の中で披露される「私のお気に入り」という歌は、文字通り、私のお気に入りだ。どんな人の心の中にも、このような「自分だけのささやかなお気に入り」があるだろう。

私は特に「お気に入り」に気づく瞬間が好きだ。有形無形の物と流れ続ける時が握手するような、あの瞬間。思い出をたぐつていくと、初めて形や色や感触の美しさのようなものを意識するようになったのは、小学生になつたときだ。それまでも五感が刺激されることはあるた。けれども学校との出会いを境に、急にさまざまなものの私に語りかける声が聞こえるようになつたと思う。

最初は制服のリボン。入学式の朝の、真新しいリボンの張りと控え目な光沢。襟元でふんわりと結ぶと、色も手触りも採れたてのレタスそつくりだつた。それからの私は、キヤベツよりもレタスをたくさん食べるようになつた。次は、上靴入れの袋。その深いえんじ色とレタスのリボンの色合わせに私はどきどきした。リボンと上靴入れが「私たち、今日から友だち」と、私を仲間にしてくれた。母と写真を撮ろうと、校門付近の桜の木の下に立つたとき、母の黒い着物の肩の上に、花びらが次々と舞つて降りる。黒の上に乗つた桜の色は、いつそはかなく見えた。それから上靴に履き替えて、初めて校舎に入る。木造校舎のこげ茶の床に乗せた新しい上靴のまぶしさ。上靴が足に張り付く感触。ゴム製の靴底は、走りたくなる足にブレーキを強くかけてくれる。教室へと続く廊下にはあちこちに木の節があり、鯉のぼりの眼のように私を見つめている。見つめ返しながら、これからどんな発見ができるのか、わくわくした。

小学校での毎日は、友人たちとの校舎の探検と、魅力的なものの発見だ。教室に入つて見上げれば、天井には柱の王様。どうやらこの王様は「ハリ」という名前らしい。すべすべなのに、所々ささくれを隠し持つ階段の手すり。板チョコのような階段は、踏む場所によつてはギリギリと音が鳴る巨大な鍵盤。階段の途中で向きが変わる場所は「踊り場」だと知る。その優雅な名前にうつとり。階段を登りきると、一直線に伸びる幅広い廊下。床の板も壁も天井も、彼方のある一点で出会おうとしている。その彼方から手招きされる氣がして、先生の眼を盗んで端から端まで友だちと何度も走つたことだろう。

ガラス窓、イヤリングのようにゆれる窓の鍵。もう、胸がいっぱいだ。

「私のお気に入り」を口ずさみ、両手に持ちきれない宝物と遊ぶ。形があるうと無からうと、その呼吸を今日も私は聞いている。きっと、あちら側から私のことを見たり聞いたりして、面白がつていてるにちがいない。お気に入りたちから「お気に入りに登録」されているのなら、この上ない幸せ。

ゴム手袋

堀 田 光 美

「私どこで治療ができませんので、病院を紹介させてください」

さつそく紹介された大きい病院に行くと、MRIとかいうものを勧められた。気持ちのええもんじやねえ。

「骨腫瘍と言いまして足首の骨を癌にしやぶられ、体を支えられるだけの骨は残っていませんねえ」

△愛されて骨の髓までしやぶられた

切り落とした足は合同葬をして、希望があれば灰の一部を小さな骨壺に入れて返してくれるそな。どうしようか思ったら、長男が首う振つた。灰を持ち帰つて、いつまでも、めそめそするより、どうやって歩くかのほうが大事じやねえんかと教えてくれたんじや。

△看護師が痛いですかもあるまいに

担当の看護師さんが、

「痛みますか」

と聞いてくれんさる。

「そりや痛えわあ」

と言いてえが、やさしい声で心配してくれどるのに、そげえな、えげつねえこたあよう言わん。

「我慢のできる範囲です」

「病院に居て我慢しちゃあおえんのよ」

岡山弁で返されて、ほつとした。病院は我慢するといじやねえ。思わず笑ろうたで・・・。

△清拭がゴム手袋をして触る

看護師さんが体あ拭きい来てくれる。一週間に一回じやつたり、二回じやつたり、座るときも、転がるときも、抱えてもらう。こつちから抱きつかにやおえんこともある。うれしいんじや。せえが。

下半身は両方の足を持ち上げ、赤ちゃんのオシメ替えとおんなどじや。八十歳前のおじいさんがよ。でえれえ恥ずかしいんじや。

ボディソープ言うんか、介護用清拭剤言うんか知らんが、ガーゼのハンカチみてえな物に染み込ませて、耳のうしろから首筋、背中を拭いたら抱つこで転がされ、胸、腹と下りて、股間を拭いてくれんさる。看護師さんが二人がかりで、起こしたり、転ばしたり、裏返したり、オモチャにされる。足の先まで一通り終わると、パンツう履かせパジャマを着せて片づけをはじめる。

清拭剤やガーゼなどまだ使えるもんを箱の中え仕舞い込んで、使ったガーゼやら汚れたもんをナイロン袋へ入れて、おしめえかと思つたら、手袋を脱ぐんじや。若い女性に裸あ拭いてもううて舞い上がつとるもんじやけえ手袋をしとるやこう思いもせなんだ。薄いゴムのやつじやけえ、騙されたよなもんじや。

（わしの体あ汚物か）

（そりや汚物じや。汚れとんじや）

患者の体を触るときや手袋をするよう教えられとんじやうけえ。看護師さんが正しいんじや。じやがの

お・・・。やつぱりさびしかつたなあ。

ショートステイ

片 岡 由紀子

夫の在宅介護も四年近くになる。体力的にも精神的にも、老いの身に疲れやストレスは溜まつてくる。「奥様が倒れられては大変ですから、ショートステイを利用されることをお勧めします」

ケアマネージャーや看護師さんから再三提案されていたが、なかなか決心がつかない。

週一回のデイケアでさえ「もう行かん」「今日は休む」などと言い続いている。たとえ一泊でも他所で泊まることがことなど、首を縊に振るわけがないと思うからだ。一方では、一晩でもゆっくり眠りたい。夫のことを気にせず外出したい。利用してくれたら、どんなに伸び伸びできるだろうかとの思いも強い。

先の見えない介護の日々は「わがままばかり言うのなら、もう世話は、せんからな」きつい言葉を吐く事もしばしば。「もう少し優しくしなくては」「心の中に鬼が棲んでいる」後悔し自分を責め、ストレスとなる。

「ものは試し。どんな所か行ってみましょう」

ケアマネージャーさんが、上手に夫を説得して下さり、六月中旬一泊一日で利用する事になった。「やつぱり行かん」そう言うかもと心配したが、素直に迎えの車に乗った。

さあ、今日と明日は自由な時間だ。大急ぎで身支度を整えると、駅へ急いだ。何十年も会っていない幼稚園みど、倉敷で落ち合う約束をしていた。心弾ませ電車に乗り込む。

電車が岡山を離れるにつれ車窓の景色も、文庫本の文字も目に入らなくなつた。「今頃夫はどうしているだろうか。帰ると言つて、スタッフの方を困まらせてはいられないだろうか」

心の隅にくすぶつっていた不安が広がつてきた。先ほどまでの浮き浮きした気分が消えゆく。倉敷に着くやいなや電話を入れた。

「大丈夫ですよ。ゆっくりされていますよ」

電話口の声に胸の支えが溶け、ほつとする。

時間を気にすることなく幼馴染みと、旧交を温め心ゆくまでおしゃべりした。体中に絡まつた介護という糸から解き放たれた一時だ。

友と別れスーパーへ立ち寄ろうとしたが、今夜は一人。残り物で済ますことにした。

日頃は狭く感じる寝室も、しーんとして広く見える。「おーい、お母さん」「おーい、来てくれ」ちょっとした事でも呼ぶ夫の声もない。テレビの音だけが流れる。食事は、トイレは大丈夫か、眠れているだろうかと、又しても要らぬ心配が頭が過ぎり、眠れない。

翌日夕方、少々疲れたら様子だったが、思いの外機嫌よく帰宅した。「気分転換になつてよかつた。うるさい婆さんはおらんし、若うて優しい人ばあじやつた

憎まれ口を言いながらも「家がええのう」ぼそりと言つた。強がつてはいるが、夫の性格からして不安や我慢があつたはずだ。「ありがとう」心の中で感謝した。夕食は好物のオムライス。たわいない会話が続く夜。

お互いが、ちよつと距離を置き、小さな刺激と新鮮な空気を吸つたショートステイ初体験。明日からの介護への束の間の休憩時間だった。

くそべえ

藤井信哉

長年、手元から離さず、飽きもせぬ読み続けた、くそべえ。余りにも汚れてぼろぼろになつた、くそべえ、を取り替えるために真新しいものを届けた。その後、母は呼吸困難に陥り、入所していた特別養護老人ホームから市民病院に入院した。母、九十八歳。その時には、すでに意識は失われていた。

私は、多趣味である。特に川柳が好きで三十歳頃から新聞投稿を中心にして作句していた。入選作も二百句を超えていたので、還暦を記念して一冊の作品集を生きた証として、自費出版することを思いついた。題名が先ず閃いた。くそべえ、にしよう。亡父と確執があつた思い出のことば。教師経験のある父は、ひとつの事を究める者を好んだ。反対に私はあらゆるものに興味を持ち、片つ端から挑戦した。悪く言えば飽き性、良く言えば好奇心旺盛だった。そして、屢々父と言い争つた。父は、私を、くそべえ、と言つて罵つた。つまり、糞蝇（くそばえ）が岡山弁では、くそべえ、となる。糞蝇は糞を求めて次から次へと移動する。ひとつの事に集中出来ない、という意味である。

私の意図する作品集は、川柳を中心ではあるが、詩もあれば漫画もある。そこで思いついた題が、くそべえ、なのである。母は、その時米寿の八十八歳。父亡き後、三代続いた酒類小売業「とたばこ」その他食料品、雑貨の店を一人で営んでいた。その合間に、亡き父から書道教室を受け継ぎ、子供から大人までの幅広い年齢層の人たちを教えていた。ここは得意の筆を愛惜のためになつてもらわなければならない。

自費出版の経緯を話して、「題号は、くそべえ、にしようと思よんじや」と揮毫を頼むと「そりや、いけん。もうちよつとましな題はねえんか? そねえな、変な題なら書けん」と言い張る。「この題がわしの集大成を表しとるんじや、何とか書いてくれえ」と頼み込んで、仕舞いには、しぶしぶ乍らも素晴らしい変体がなで書いてくれた。

刊行後、いの一番に、くそべえ、を母に届けた。あんなに反対した題号、くそべえ、にも満更でもない風である。以来、母は、くそべえ、を絶対に手元から離さなかつた。来店の客に次々と見せて自慢した。また、私が帰郷すると、くそべえ、を開き、自分の気に入つた句を何度も朗読する。そして、最後には必ず「あとがき」の自分の事が書かれた部分「何よりも還暦の息子の事が未だに心配な米寿の母が、本書の出版を喜んでくれている。本書の題名も得意の筆で、揮毫してくれた。いつまでも元気でいて貰いたいものである」を指でなぞりながら「信哉がこんな事を書いとる」と何回も何回も読み上げるのである。母の最もお気に入りの所である。

読んで読み尽くしてぼろぼろになつた幸せの、くそべえ、を棺の中の母の胸に置く。母にとつてはベストセラーの、くそべえ、の新品を更に一冊胸に供えた。

はしつこの家族

かあい 潤

金曜日は可燃ゴミの日。家中の中から不要な物がなくなると、とてもすつきりする。頭も肩も軽くなる。カラ梅雨のさわやかなその朝、家中のゴミを市指定の半透明の黄色いビニール袋に詰め込み右と左の手にぶら提げて門を出た。すると両扉の横に何かがころがっていた。ソフトボールほどの大きさ。サイクロン掃除機から転がり出たゴミの塊という形状だ。

「なぜ、玄関先にこんなものが……」

ちょうどその時少し強い初夏の風が吹き抜けた。茶色の物体は目の前を軽やかに転がった。30リットルの黄色い袋を提げたまま私は、思わず後を追いかけた。そして先回りして足で進路を塞いで止めた。

「ゴミなんかじゃない」

袋を地面に置いて両手でそつと拾い上げた。

「鳥の巣だ」

昨夜は風が強かった。そのおりにどこかの木から落ちてしまつたのだろうか。抹茶茶碗のような形のその巣には卵のかけらも宿主を特定できるような羽毛も付いてはいない。おそらく野鳥が、マイホームを新築しつつ卵を産む時を待つていたか、あるいはカッブルが上手く成立しないまま放置されたものだつたのかだろう。巣を無くしてあわてた様子の氣の毒な鳥が近くにいるかと電線や近所の屋根を見上げてみたがスズメ一匹轟つてはいない。

この地区的収集時間はいつも早くパッカー車に間に合わないことが何度もあつた。私の手はオートマチックにその巣を黄色いゴミ袋のわずかなすき間に押し込んで、あわてて収集場所へと急いだ。

帰り道、さつきの鳥の巣のことを考えていた。草の茎や稻わらやシユロの皮のようなもので編まれたその巣にはまちがいなく換毛期のウチの犬のくすんだオレンジ色の毛がひとつたまりとウチのネコのコーヒー色の冬毛のかたまりが編みこまれてあつたのだ。あの糸クズや布の纖維のようなものは、ウチの洗濯物から出たものかもしれない。家族の「いつてきます」や「かえりました」、私の「やれやれ」や「よつこらしよ」や鼻歌や溜息を玄関先で拾い集めて編みこんであつたかもしれない。

ひとつそりといつのまにか庭のはしつこを生活の場に遊び、我が家の一いちいちを拾い集めて巣作りをしていた、見たこともない野鳥を愛しく思つた。その鳥は、いわばはしつこの家族であつたのだ。

「あわてて、捨てなきやよかつた。今度はもっと丈夫な巣で雛鳥を育ててみせてほしいなあ」

梅雨入りしたのに晴天が続く。

「さあ、洗たく、洗たく」

初夏の一日が始まった。